

覇権国家「ロシア」の本質と民族性

—シベリア鉄道から見たロシアの実態—

1. はじめに

3年前（2003年）の厳冬期に世界一長い鉄道（全長 9,258 km）に乗ってシベリア大陸を横断した。シベリア鉄道が、その前年の暮れようやく全線電化されたと聞いた。どうせ気象条件の厳しいシベリア大陸を横断するなら、カチューシャを追ってネフリュードフが辿って行った、最もシベリアのシベリアらしさを感じさせてくれる、雪の降る季節に行ってみたかった。積雪期のシベリア、これがシベリア鉄道に乗る決断を促してくれた。

車窓から見た風物、列車で知った意外な出来事、途中駅やモスクワ市内で見聞したショッキングな現象を通じて、ある程度予期していたとは言え、かつてのソ連秘密警察国家の後継である、「ロシア共和国」の粗野な実態には、思わず目を剥いた。相変わらず独裁者スターリンにつながるDNAを受け継いでいるなあというのが、偽らざる実感だった。やはり本質は変わっていないことを臨場感から実感した。

近年ロシア国内ではこれまで歯牙にもかけられていなかった人口減少問題が、喫緊の重要課題として浮上し、実は今年に入ってから、このままでは国家の存亡を左右しかねない事態になりかねないと、ようやく真剣に受け止められるようになった。5月10日の年次教書演説でプーチン大統領自ら、全演説の四分の一の時間を割いて人口減少問題に触れ、それをもたらした主要な原因である平均寿命短縮と出生率低下の解決のために、粗悪アルコール飲料の生産と輸入制限、及び育児保護支援に国費を投入することに初めて言及した。

今日ロシアは解決を迫られている、数多くの根源的な問題を抱えている。その最大のネックが人口問題である。人口推移は自然のままでよいとこれまで放置していたツケが、突如目の前に浮上したのである。さらに、領土問題、経済成長、安全保障しかりである。加えて、案外見逃されているのは、相手から理解や了解を得ずに自分なりの思考回路で強引にことを進め、暗躍と力づくで物事を解決しようとするひとりよがりの発想と乱暴な行動パターンが、外国から強く非難され快く思われていないことにロシア人自身がまったく気づいていないことである。これではロシアが大国意識を振りかざし、自己主張すればするほど、まともな国がロシアから離れていくだけである。

近年ロシアに関して報道されるニュースや統計数字の中には、他国では考えられないような、野卑で無神経な事件が多発するのは、残念ながら事実である。過去の歴史上の史実を併せ考えて、それらを見聞するたびに、時により思わずため息が漏れることがある。これまでロシアに関する真の情報と実態は良かれ悪しかれ、あまりわが国に正確には伝わってきていない。筆者の未熟な観察を通して、あまり伝わっていないロシアの実情とロシア人気質について、率直に紹介してみたい。それが読者にとって、「ロシア」というヴェールに包まれた摩訶不思議な国を、多少なりとも理解する一助となれば幸いである。

シベリア鉄道の旅で感じたロシアについての大雑把な印象については、すでに「知的生産の技術」(04年6月発行273号)誌上に「シベリア鉄道を通して『大国ロシア』を見る」と題して拙い一文を寄稿した。併せてご高覧いただければ幸いである。

2. いまのマス・メディアから真実は伝わらない。

本稿はあくまで個人的な視点に立った見方であるが、極力個人的偏見を押え目に、ありのままに感じたことを書いたつもりである。もとより斯界に異論のあるのは承知しているが、筆者に言わせれば、今日公器であるジャーナリズムが欧米重視一辺倒の報道姿勢を崩しておらず、ボリューム的にもロシアや旧東欧に関するニュース自体極めて少ない。一例を挙げれば、スポーツ報道が、完全に欧米優先で極端に欧米に偏っていることからもお判りいただけると思う。イタリアのセリエAや、イギリスのプレミアリーグ・サッカー、アメリカのメジャーリーグのような、鐘や太鼓の報道合戦に比べて、どれだけロシアの国内スポーツが日本に紹介され、報道されているだろうかと冷静に考えてみればよく分かることである。もちろん日本選手の活躍という商業的な一面があるにしても、あまりにも彼我の差は大きい。

これまで日本のマス・メディアが報道する海外ニュースからは、ロシアに関するホットで正確なニュースはほとんど伝えられてこなかった。実際本当の姿、知りたい情報が伝わって来ないというのが正直なところである。それは報道に携わるプロのジャーナリストの姿勢に、かつてのKGB(秘密警察)の影に惑わされ、ロシアの実態に迫って真実を報道しようとする真剣な意欲と勇氣ある行動力が欠けていたからでもある。その点について、拙稿『『臨場感』とは何か?—現場で感じる『臨場感』とジャーナリズムの対応—』(前掲誌03年10月発行266号)の中で、筆者自身が戦乱の現場で生死を賭けた厳しい対応を迫られた体験から、現地を訪れず現場を見ず、「臨場感」を感じようともせず、取材と称して内部社会で行動する現代のギルド、マス・メディアに対して厳しい注文をつけた。

それでもニューヨーク・テロ事件当時に比べ、今日のマス・メディアは全般的に少しずつではあるが改善され、視点とスタンスを現場へ向け、現場へ足を運ぶようになった。だが、ことロシアに関しては、相も変わらずロシア側の何らかの報道規制があって、ロシアへの遠慮とか自分なりの思惑があるのか、或いは自分自身の信念を持って本当に事実を報道しているのか判然としない。いくらロシア当局の監視体制が厳しくとも、もっと現場へ身を投じ、自分の目で見たホットなニュースを伝える努力を怠ってはならない。現状は、伝えられるニュースのボリュームも圧倒的に少なく、これでは現実のロシアを正確に伝えているとはとても思えない。ロシアのリトマス試験紙を通して、われわれに伝えられるロシアの実態は、はっきり言って臨場感と説得力に欠け、真実に肉薄しているとは言えない。あらゆる手段を行使して取材し、その中で得た情報を取捨選択しながら、自分の信念をベースに真実を報道するというジャーナリズム本来の姿が見られない。その意味では充分真実を伝えているとは言えないのである。ロシアの社会には、われわれの常識とか、社会通念を平気で覆すような事

象が目の前にひっきりなしに展開されている。しかし、そんな事実が日本にはほとんど伝えられない。「えっ？ そんなことがあるの？」ところが、「そんなこと」が実際にあるのだ。そうした驚きが当たり前であること自体、普段から報道が正確に伝えられていない、何よりの証拠ではないだろうか。改めてそんな感じにとらわれたシベリア鉄道の旅だった。

3. ソ連の崩壊とロシアの実情

シベリア鉄道で旅をして3年、この間仄聞するニュースを自分なりに検証してみると、ロシアという国は最近になって、また大きくカオスと強権力の世界へ舵をきったと思う。それは最近の事象が、決してわれわれが望むような方向へ転換していないということを示唆している。端的に言えば、ロシアはごく平均的で、常識的な人々を大いに失望させるような行動で自分たちが信じるファジーな一本道をひたすら歩みだし、そのスピードも一気に加速しているのである。近隣の旧ソ連衛星国や親西派路線をとるウクライナに対して、弱みに付け込んで天然ガスの供給を一時停止する手荒な手法を使うようなことは、元の同盟国に対して「大国」のとるべき対応ではない。とにかく非常識な思考と特異なパフォーマンスで、「ロシア的唯我独尊国家」へ向かってひたすら進みだした。はたしてこんな国家の統治と運営で、平和裏に国民の人権を守り国を発展させていくような国家としての責任と矜持を保っていくことが出来るのだろうか。また、国際的に理念と道理を貫き信頼を勝ち得ることが出来るのだろうか、といふかしい気がしてならない。歴史上の血なまぐさい事件とリンクするロシア国民のDNAを考えると、強圧的で残虐性とか粛清という反民主主義的な空気が、また復活してはびこり出すのではないかと妙に納得され、つい悲観的なイメージにとらわれる。

1991年、一枚岩だった社会主義体制が挫折して国家が崩壊し、経済的に追い詰められ、さすが鼻っ柱の強いロシア人も落ち込んでしまったように見えた。だが、実はしばらく鳴りを潜めていた妖怪「ロシア」が経済成長というまたとない僥倖に乗って、「そのけ、そのけ」とばかりに再び表舞台へ不恰好な姿を現したという舞台回しになってきたのである。またぞろ「大国意識」に染まった得体の知れない妖怪が、法衣の下に残忍性をひた隠し、鎌首をもたげてきた。一九世紀中葉にマルクス・エンゲルスが「共産党宣言」の冒頭に書き出したように「ヨーロッパに幽霊が出る—共産主義という幽霊である。・・・」の幽霊が一世半を経て、再び躍り出てきたのである。「共産党宣言」に書かれた幽霊とは、まったく異なる「ロシア」という共産主義とは似ても似つかぬ幽霊が甦ってきたのである。

筆者はロシア問題の専門家ではなく、従ってロシアの歴史や民族、地勢、統計数字等に詳しいわけではない。しかし、学生時代から多少ロシア文学をかじり、若干ロシア社会主義思想史関連の書に触れ、統計数字を分析してみて、そのうえで現地の空気に浸り、そこで感じる臨場感を持って土地の人びとと意見を交わしてみると、ロシアの本当の姿がぼんやりと見えてくるものである。

ロシアについて若干の関心と問題意識を抱くようになった理由を敢えて挙げるなら、ベト

ナム戦争が激しかった、1960年代に最大の関心国であったアメリカ、中国、キューバ、ベトナム、中東諸国等と並んで、旧ソ連は最も興味と関心を抱いていた国家のひとつであった。時は流れ、ペレストロイカ時代の少し前あたりから、旧ソ連は知れば知るほど実際は、大分われわれの期待を裏切っていると、センシティブに気がついてきたのである。実態を知らされないまま、それまで社会的科学主義の理念の中に正義を信じていた筆者にとっては、少なからずショックだった。「鉄のカーテン」と揶揄された秘密主義の旧ソ連は、本音と建前、表と裏の世界、国内と海外、共産党幹部と労働者、特権階級と底辺の国民、という二面性を、その統治の中で政治的に、また経済的に巧みに操りながら、一枚岩体制を堅持して自国のみならず、同胞の旧東欧諸国をも実質的に統治していたのである。

それにしても、社会主義の仮面を被って本音と建前を使い分けていた、かつてのソヴィエト社会主義連邦国家の本質、いわば二面性をどうして世界の錚々たる知識人が長い間見抜くことが出来なかったのか。正直のところ今日でも旧ソ連時代に、甘い汁を吸ったうさん臭い事大主義者に対して、疑いと不信感は消えていない。新しい国家としてスタートしたロシアは、民主国家として生まれ変わって再出発したと取りあえずは国際社会で認められた。だが、ソ連崩壊から15年を経過して、その幻想も大分怪しくなってきた。旧ソ連は反革命や国民のゼネストのような民主的な国民の連帯行動によって崩壊し、根本的に体制が変わったわけではない。外枠とカンバン、それに経済制度のフレームだけが変わったに過ぎない。国家の本質や民族性はそんなに簡単に変わるものではない。一時的に仮面を付け替えていただけであり、逼塞していた共産党も復活の機会を虎視眈々と狙っている。ソ連崩壊に先立ち、ポーランドやチェコスロバキアのような社会主義国家においては、国民の総力の結集によってある程度反革命が成功したと言えないこともない。名もない小さな町の工場に溜まっていた不満が噴出してストライキとなり、それが民衆を巻き込んだ地区全体のデモとなった。そこに強力なリーダーが登場して、次第に大規模で反国家的なゼネストへ組織化して、国家体制に対する国民の激しい反感と憎悪を引き金に、大きな国民運動へ発展させ国家体制を転覆させたのである。その国民の底辺から盛り上がった世界的な反社会主義ムードの中で、ソ連は保守的な体質を残しながらひとり内的に瓦解したのである。強いて言えば、時代の潮流を読めない為政者の無能と頑固な共産主義が時代の流れに取り残され、社会主義体制が包含する矛盾に行き詰まり、自壊しただけなのである。こうした大きな変革の流れを下敷きにした、特異なロシア社会とロシア人の民族性という特殊性から目を逸らせてはならない。

4. ロシア的行動パターンの原因

表面的にはロシアの国家体制は、社会主義から自由主義へと変貌しつつある。だが、前項に記したように、最もロシアのロシアらしい特徴はほとんど変わってはいない。掲げるカンバンは確かに付け替えられた。表面的には、経済面で市場経済導入へ踏み切り自由主義経済体制に変わり、政治体制は社会主義から民主主義へ変わった。しかし、実質的には、自由主

義経済をとりながら、国家管理体制を維持する矛盾するシステムの中で、巧妙に国家の手綱捌きをしている。

毎日同じ列車で1週間も車窓から、或いは車内でロシアの乗客たちと顔をつき合わせたり会話を交わしてみると、徐々にではあるが、彼らの人柄とか行動パターンが感覚的に分かってきた。そのうえでロシアを多面的に見てみると、残念ながらロシアの指導者は、これから常識的な国民の期待に反する方向へ突き進むことが明らかになってきた。これは、冷徹なプーチン大統領がひとり進めるというのではなく、一旦権力を握ると権威を嵩にして、伝統的なロシア人の大国意識、権威主義、覇権主義的な思考回路によって生み出される、スラブ的「不条理の正当性」が顔を出すように思えてきたからである。ロシアが従来と同じように情報を操ったり、自国に都合の良いニュースだけを公開するような情報管理をして、とどのつまり誤解を生む情報を提供するようでは、世界中の多くの人びとが、ロシアを民主国家と理解してくれるとはよもや思えない。

さて、ロシア人の行動を考える時、われわれには理解し難い彼らの思考力とか、民族的性向について予め承知しておかなければならない。ロシア人の発想と思考回路を考える時、筆者には忘れがたい印象的な思い出がある。

旅行会社に勤務していた10数年前、シベリアのイルクーツク市へ出張して、同地のインツーリスト支配人と商談をした時のことである。豪華な支配人室で支配人は楽観的にロシア人夢物語を語ってくれたが、あまりにも自己中心的な考え方にあっけにとられてしまった。

そのひとつは、新規取引開始を機会に、お互いの友好、及び相互の事業発展を祈念して、双方社員の交換留学プログラムを実践しようとの突然の申し出だった。考えもしていなかった唐突な提案に驚いたが、考え方としては前向きな教育プログラムであり、実現性に疑問はあったが、とりあえずその内容を聞いてみることにした。しかし、その話を聞いている内に、あまりにも虫のいい要求に愕然とした。その内容とは、お互いに社員ひとりを1年間「あご足つき」で自国に招聘しあうというもので、その間に多くの観光地を研修旅行させるというものであった。その当時の日本人観光客のシベリアへのマーケットは、バイカル湖以外に観光地と呼べるような観光地もなく、雪の多い冬の間は住民もほとんど戸外へ出ない厳しい自然環境下にあり、はっきり言ってコマーシャルベースは期待出来なかった。それにも関わらず件の支配人は、彼らが派遣する研修生に、京都、奈良を始め日本中を見せてくれと言わんばかりの申し出であった。世界のツーリズムを研究するでもなく、籠の中の鳥が思いつきで自分たちの要求を通す、しばしばロシアの外交交渉に見られる押しの強い、過大な要求だったのである。とても呑めるような内容ではなかった。経費的には圧倒的にわれわれの持ち出しが多く、完全に公平を欠いていた。いくら教育プログラムとはいえ、とてもバランスのとれるプランではなかった。その申し出は即座に断らざるを得なかった。断った後も、支配人は中国の旅行社もモンゴルの旅行会社も喜んで提携してくれたのに、なぜ日本人のあなたはこんな良いエクステンジ・プログラムを断るのかと未練タップリの口ぶりだった。

もうひとつの話は、イルクーツク市内に新規に建設するホテルへの投資を勧めるものであ

った。まるでおとぎ話のような「毎年投資額のX%を確実に返済するし、いずれ毎年利益を確保し、将来的にはホテルのオーナーシップを得られる」という、前記のようなイルクーツクという土地柄を考えれば、誰が聞いても担保出来ない危なっかしい話を、当地の権限を持った実力者がのうのうと話して聞かせるのである。その際感じたことは、こういう雲を掴むような話を権限のある外国人（当時筆者は旅行会社役員だった）に、真面目くさって話をするセンスと節度に疑問を感じた。彼らロシア人アッパークラスの人たちには、経済観念が乏しく、いつも自分には国家という強力な後ろ盾があり、何が起きても政府が支えてくれるという絶対的な妄信がある。過去のロシアが常に国家として「錦の御旗」を掲げ、曲がりなりにも「大国」として国民を統治することが出来たのも、帝政時代の歴代の皇帝や、レーニンやスターリンのような傑出した革命家、共産党一党独裁の絶対支配に見るまでもなく、強力なリーダーシップにすぎるロシア国民の、一体感に欠けるバラバラの集合体のお陰なのである。ロシア人の体内には、集合体或いは共同体として何らかの枠をはめないと自然に崩壊してしまう壊れやすい民族としての脆弱性がある。ロシア民族最大の欠陥である。

ロシア史の専門家である青山学院大学袴田茂樹教授が、いみじくも的を射た指摘と分析をしている。少し長いが抄録（「神道時事問題研究」05年12月15日発行）から引用してみよう。

「～私はロシアを『砂の社会』という形で表現していますが、同様に欧米の社会を『石の社会』あるいは『レンガの社会』とっています。・・・上からの独裁的な権力とか、国家の統制がなくても、個人主義をベースにして市民社会的な秩序ができる。石とかレンガを一人ひとりの個人だと考えれば、それを詰め重ねると安定した形になります。・・・私は日本を『粘土の社会』といます。粘土は石よりももっと精密な形を作ることもできます。上に強大な独裁者や権力者がいなくても、社会がめっちゃめちゃになることはありません。

ロシアは粘土の日本社会に比べると、個人がバラバラに自己主張をする傾向が強くて、秩序になりません。だから、『砂の社会』と呼んでいます。安定した形にしようと思うと、『砂の社会』は硬い枠を外側からあてがわないと形にならず、その硬い枠が、帝政ロシアではツァーリの専制体制であり、帝政ロシアが潰れた後は、スターリン主義の一党独裁が形を与えるための枠だった。そして、固めるセメントの役割をしたのが、革命以前のロシアでは、ロシア正教という宗教であり、ロシア革命後は共産主義のイデオロギーです。今のロシアの悲劇はこの『砂の社会』に形を与えていたソ連邦という枠が崩れて、共産主義イデオロギーというセメントも風化してしまっって、砂社会の生地がもろにでってしまったところにあります。バラバラになりがちな安定した形になりにくい社会は経済的にも非常に難しい問題を抱えることになります」。

袴田教授はこうも言っている。「中国は独特の東洋的な地縁、血縁の結びつきの中で、法というよりもプライベートな信頼関係を重視するので、ロシアほどバラバラにならない。ある種の粘り気があるので、中国を『土の社会』とっています」。

とにかく専門家の袴田教授の検証によっても、ロシアが案外脆い体質の特殊な社会である

ことが分かる。

5. 現代ロシア社会のひずみ

ロシアは1991年の体制崩壊により、社会主義国家の基盤が壊れた。働いていた時は最低賃金を保証され、老齢になり社会の第一線から退けば年金がもらえると信じてきた人たちは、その道を閉ざされてしまった。一転して大勢の国民を路頭に迷わせることになった。一方で、資本主義のあだ花のように一部の成金亡者、拝金主義者を生み、かつては考えられなかった贅沢なリッチ階層を産み出した。社会主義の幻想を信じてきた国民、普通の市民階級にとってはあまりにも厳しいソ連の崩壊であった。とりわけ高齢者の生活はドン底に突き落とされた。

筆者もペレストロイカ時代に訪れた、かつての日本領土ユジノサハリンスク（旧豊原市）の青空市場で、日本名福原さんと名乗る朝鮮人のおばさんから声をかけられた。「私は家族ともども戦前に日本人と一緒に広島からやってきましたが、終戦と同時に日本人はみんな祖国へ引き揚げて、私たち朝鮮人だけが残されました。戦後、苦難の末ようやく安定した生活を送れると思ったら、近年になって年金が削られ生活が出来なくなって、年をとった夫も再び働き出した。私も食べていけないので、こうやってキムチを売って生活の足しにしている」と皮肉っぽく言われた。

シベリア鉄道沿線の各駅でも、同じように物売りをしているおばさんたちの姿を随所に見た。まれには、若くきれいな娘さんもいたが、大抵は福原さんのようなお年寄りが物売りをしていた。それぞれの駅によって商売のやり方は異なるが、そのほとんどは駅構内の屋根のないプラットフォーム上に売り場を指定され、おとなしくその場で商いをしていた。中には、規制や制約もなく自由に商売を許されている駅もあって、列車が停まるとわれ先がちに売り子が各車輛のデッキに殺到して群がるために、乗客が降車出来ず、女車掌を悩ませていた。

販売商品は、乗客のおかず用にそれぞれの家庭で作る手料理が主で、オムリ（ニシン科）の燻製、ぎょうぎ、キムチ、ボルシチ、チーズ等がそのほとんどだった。

いまロシアの市民はみんな生活に追われて気持ちに余裕がない。目指していた目の前の目標とか、ゴール、夢が、ある時忽然となくなってしまったのだから無理もない。やみくもに自由主義経済が導入されたが、まだ未成熟で基盤が不安定である。一部の人間を除き、ようやく得た仕事ですら、決して安定しているわけでもなく、サラリーだって必ずしも満足のいくものではない。一億四千万の国民が気持ちのうえで、流浪の民なのである。

そのロシアは国家として、いまでも多くの難問を抱えて国民の要望に応えきれないでいる。対照的に、周囲の西側先進国はますますスピードを上げて前進を続けている。焦る気持ちのロシアにしても内とともに外へも気を配らなければ、諸外国との競争に勝ち抜いていけない。このまま進めば下手をすると劣等国に成り下がるのではないか。今日ロシアの人びとには将来に大きな希望が持てないでいる。かつて領土拡大主義をとっていた覇権国家ロシアとして

は、もたもたしていたら欧米諸国、日本、中国等からよだれの出る資源豊富な国土を狙われ、侵略されるのではないかと少なからず危惧している。そうした、あせりがこれまで「枠」＝フレームを構築してきたロシアの政治家の頭の中をより一層混乱させ、ロシア国内はてんやわんやなのである。

6. ロシアが抱える最大の課題「人口減少」

ロシアにとって目下の喫緊の課題は、現状の経済停滞より、未来を展望する時見えてくる弱体化した国家の将来像である。それは言うまでもなく人口減少問題である。人口問題はいまや待ったなしの危険水域に入ってしまった。国家の骨組みと土台はそこに居住する国民が造り上げるものであり、国民の健全で安定した生活基盤が構築されない限り、国家の存続と永劫なる繁栄は期待出来ない。然るに、その土台となる国民人口が毎年確実に減少している。しかも、諸外国には例を見ないほどのハイスピードで、とても尋常ではない原因が素で激減しているのだ。

地球儀を見れば一目瞭然であるように、ロシアの国土は文句なしに世界一の広大さを誇っている。ソ連崩壊後バルト3国を始め、かつてソヴィエト連邦を構成していた国々が独立国となってなお、全世界の陸地の8分の1を占めている。日本の国土の約45倍にあたる広大なスケールである。その点では、今日まで領土拡大主義を取ってきたロシア人先人の意向と戦略は成功だったとも言える。

しかし、一方で、国家の礎を支えている国民が年間70万人も減少するというのは、国のバイタリティーを示す大きな指標の一つが減ることであり、車は大きくなったが排気量は逆に低下しているということであり、悪路では車は動かなくなる。人口が毎年確実に減少している人口問題は、世界最大の国土を有するとはいえ、悪路の多いロシアにとってはこのまま見過ごすことは出来ない。

異常な人口減少の実情と原因を例示してみよう。

- ①平均寿命が主要国で世界最短（2002年）。過去15年間で男の寿命は5年短縮した。男 58.6歳、女 73歳（日本 男 78.64歳、女 85.59歳、2004年）
- ②いまのままだと、40～50年後には、人口は現在の3分の2まで減少する。
- ③死因の30%はアルコール依存症。
- ④2,000万人の労働可能男性のうち、500万人は失業中、400万人は兵役、同じく400万人が慢性のアル中、100万人が麻薬常習者、同じく100万人が刑務所内にいる。
- ⑤1989年から13年間に540万人が国外へ移住、流失した。
- ⑥1997～2004年に、10万人の学者が国外へ流失した。
- ⑦毎年70万人の人口が減少している。

- ⑧70万人のうち、20万人の若く健康な男性が、自殺、アル中、麻薬、交通事故等で死亡している。
- ⑨現在14歳以下未成年者のアル中患者の増加が顕著で、10万人当たり17人が医療を必要としている。
- ⑩新生児出生率は1.16%で世界最低水準である（ペレストロイカ以前は2.2%）。
- ⑪新生児誕生数を、中絶による堕胎数が上回る。
- ⑫このまま減少傾向が続くと、2025年には、ひとりの労働者が平均4人の扶養家族を抱えるという構図になる。

右記の通り今日のロシアは人口減少を含む、厳しい難問を抱えている。ひとつの懸案である、人口問題解決へ向かってようやく歩き出したが、この間に辺境のシベリア地区では、中国人移住者がどんどん流入して、不法滞在者の増加も懸念され、移民受け入れに強い拒絶反応を示すロシアの帝国主義者たちをやきもきさせている。世界的な傾向とはいえ、ロシアにとっては瑣末なこととして気にも留めなかった人口問題が、思わぬかたちでいまやロシアの存立基盤を揺るがしかねない事態になった。

さて、人口問題と並行して、ロシアが解決しなければならない大きな国内課題は、市場経済導入による経済破綻が産み出した社会保障制度の崩壊とモラルの低下に伴う社会不安、そして市民生活を脅かす治安問題であろう。思想的に社会主義の拠りどころとなっていた弁証法や唯物論からは、考えてもみなかったホームレスの増加が経済停滞を反映し、社会不安に拍車をかけている。麻薬常習者、エイズ患者、銃刀不法所持者の増加で治安も乱れ、夜の町は危険なところも多くなってきた。

実際、雪の降る昼日中に社会主義の牙城でもあったクレムリンの城壁伝いに歩き回る、何人もの乞食にお目にかかった。

7. 良くも悪くも、ロシア人気質

今日のロシアをロシアたらしめている大きな要因は、根源的にはロシアの人びとの身体の中に棲む民族的体質に根ざしていると思わざるを得ない。

袴田茂樹教授が指摘したように、ロシア人は「砂の社会」に住んでいると考えられている。いつの時代にも普通のロシア人は自らの「砂の社会」を崩されないよう為政者によって堅い「枠」＝フレームで支えられて、その社会の中でおとなしく生活していた。それは、帝政ロシア時代におけるツァーの圧制の枠であり、ロシア革命時のレーニン、スターリンの独裁的レジームの枠であり、その後のソヴィエト共産党一党独裁による支配の枠であった。ソ連崩壊により、権力を誇った共産党が「張子の虎」となった現在、「枠」の中に飼い馴らされていた「迷える羊」は、その「枠」から放たれて行き場を失い、再び強力なリーダーの出現を

虚しく待っている状態なのである。

では、プーチン大統領はどうか？ KGB出身のプーチンにはレーニンのような哲学や理論がない。スターリンのような、社会の混乱期にのみ通用する、狂人的とも思えるほどの冷血鬼の行動力もない。欧米に負けまいと物言わぬ弱小国に対して、氷のような冷たい面相で強圧的に恫喝してロシア的な力を誇示して新たなフレームを構築しようと、自らの存在感をアピールしている、功名心の強いロシア的な事大主義者に過ぎない。しかし、いまや時代は移り変わり、自国民を世界の目から目隠しして、思いのままに国を牛耳るといえるのは時代的にも、神がかり的人材輩出の面でも不可能と思われる。フレームを造る保護国家社会は、政治にしる、外交にしる、経済にせよ、今日のようなグローバルな時代に適応しなくなったからである。当然ロシアはいま内部から大きく変わらなければならない。

一般的に人間的に温か味のある包容力、文化・芸術性に秀でた高い教養と素養、逞しい闘争心とひたすら耐え抜く忍耐力等は、果てしないロシアの大地が育んだロシア人の際立った魅力と特質であり、なんびとにも誇られてしかるべき固有の財産である。また、ロシア人は本質的に残虐性を有している反面、死者に対して意外にも手厚く弔う強い気持ちを持っていることである。これは、シベリア抑留者に対する旧ソ連政府の残忍な取り扱いから、ともすると誤解されがちであるが、一旦天に召されれば、その魂を丁重に弔っていることは、シベリア地方各地の日本人埋葬墓地に戦没者の名前が判明した後は、きちんと戦没者の名前を記した墓碑を建立して、墓地を他の土地とは区分けして、墓地全体を手厚く祀り清潔に管理していることでも明らかである。ロシアの人びとの名誉のために、この点だけは記しておくねばならない。

もうひとつ民主主義的な評価を加えたいのは、あるコンサルティング会社の調査によると、アメリカを抜いてロシア人女性の管理職者比率が世界一高く、実に四二%を占める。先進国の中でもダントツで、流石のアメリカ女性も三位で、先進諸国の中では日本とオランダが僅か七%で最低水準にあり、まったく顔色なしといったところである。

これからは、政治、外交のような華やかな面だけでなく、これらロシア人独自の優れた資質のようなプラス面をもっと訴え、存在感を存分に示してもらいたいと願わずにはいられない。

一方で、今日ロシアが行き詰った主要な原因となった、ロシア人の特異な性癖と民族性は、ロシア人の優秀性とはまさに裏腹の関係にあったが故に、これまで強く糾弾されることはなかった。ロシアの暗い過去をあまり暴露されたり、不都合な数値を公にされることがなかったのである。しかし、これからは本当のロシア、真実のロシア人を全体的により知ってもらうためにも、あまり報道されることがなかったロシア人の民族性や性向、加えて歴史上の負の部分にももっとスポットライトを当て、広く検証することも必要であると思う。

8. 血塗られた近代ロシア史

近代ロシア史上血なまぐさい事件は引きもきらない。

1896年5月、ロシア最後の皇帝ニコライ二世の即位を祝って集まった群衆が、将棋倒しで死者1,389人を出した大惨事「ホディンガ原の惨事」は、ロシア革命を予兆させる事件だった。今年で事件から数えてちょうど110年になる。20世紀に入って早々1905年1月に起きた「血の日曜日事件」は、ロマノフ王朝のファッショに対する庶民の日頃の不満が爆発した事件であるが、これがロシア革命の伏線になる。死者は四千人を数えたといわれる。時を置かず同じ年、映画で有名になった「戦艦ポチョムキン水兵叛乱事件」が起きた。いずれも有無を言わず「柙」の管理者であるツァーは、関わった市民や水兵をほとんど「皆殺し」感覚で鎮圧してしまった。ロシア革命後、独裁者スターリンは、キーロフ暗殺事件、反トロツキー派センター事件という2大弾圧を始めとして、多くの反革命者や反対者を粛清、虐殺し続けた。スターリンの粛清によって葬られた犠牲者の数は、実に延べ1,000万人を超えたと言われる。第2次大戦中のナチスによるホロコースト犠牲者が600万人だったことを考えると、いかにスターリンが、歴史上空前絶後のむごい殺し屋であったということがよく分かると思う。

激しかったスターリングラードの独ソ地上戦（1942年6月28日～43年2月2日）で、ドイツ及び枢軸軍23万将兵が戦い、戦後9万人が生き残っただけだったが、シベリアへ抑留され祖国へ帰還出来た兵士は、僅か6千人といわれる。日本人捕虜もシベリア抑留で8万人近くが亡くなった。残虐なスターリン手法は、国際赤十字の捕虜取扱協定を無視してまでも捕虜を過酷な労役に使い、多数の犠牲者を生ぜしめた。イルクーツク市内を走る市電を、土地のロシア人はいまでも日本人捕虜が線路を敷設してくれたと懐かしがる。

しかし、社会主義を擁護する歴史家は、「技術革新や階級闘争の波に乗っただけで、その人物の有無に拘わらず歴史は似たように進んだはずだ」とスターリンを弁護する。このようにクレムリンの暖かいサロンに通いながら、雪の中をさ迷い歩く労働者たちを見捨てる似非社会主義者によって、旧ソ連の社会主義らしからぬ社会主義体制が長い間維持されてきたとも言える。

ごく最近日本でも関心を集めた、杜撰な大事故と、大量殺人事件を振り返ってみるだけでも、本性とも言えるロシア人権力者の性向がある程度窺える。氷山の一角ではあるが、参考のために列記してみる。

①1986年4月、チェルノブイリ原子力発電所（ウクライナ）放射能漏れ事故

事故直後、ソ連政府死者31名と発表、その後犠牲者数を13,000人、40,000人と度々訂正。16万人が移住、事故処理者86万人中55,000人死亡、ウクライナ被爆者343万人

②2000年8月、原子力潜水艦「クルスク」沈没事件

乗員120人死亡、水深108m、事故原因不明、救助に問題あり。
軍艦大事故は、68年以降5件発生・犠牲者合計410人

③2001年10月、旅客機ミサイル誤射により墜落

イスラエル・テルアビブ発ノボシビルスク行旅客機がミサイルに打ち落とされ、爆発、墜落、乗客66人（大半がユダヤ人）死亡

④2002年10月、モスクワ市内「ドブロフカ・ミュージアム」劇場占拠事件

チェチェン独立派武装勢力42人による劇場占拠、人質922人、ロシア政府強硬姿勢でガス弾携帯の特殊部隊突入、129人のガス中毒犠牲者が出た。

⑤2004年2月、モスクワ地下鉄爆破テロ

⑥2004年5月、チェチェン共和国カディロフ大統領爆殺

式典出席中の大統領の椅子に時限爆弾を仕掛け、カディロフ大統領即死

⑦2004年9月、北オセチア（ベスラン第一中等学校）事件

武装グループによる学校占拠事件で、人質1,181人、犠牲者はこども600人？

あまりにも野蛮で無神経な事故や事件が頻発している。事件後の対応や解決方法も粗雑で人命に対する尊厳があまり感じられない。被害者はあまりにも気の毒であり、遺族の悲しみは決して消え去るものではない。それにしても、解決の方法と初期動作をもう少し慎重に進めていれば、犠牲者の数はこれほど増えることはなかったのではないかと推測される。解決手段と方法が悪い意味でロシア的で、話し合いには応じず、力で屈服させようとする。とにかく強引なのである。すべてに荒っぽく雑駁である。原因解明や原因調査をウヤムヤにして公式に詳らかにしないのも問題である。飛び込んで来た「もらい事故」やテロ事件には、同情を禁じえないが、それにしてもその原因の大半は自ら撒いた種といってもいいし、その後の強圧的な対応が被害を拡大させた大きな原因である。

10. 危なく、無神経な交通規範

シベリア鉄道でも筆者はこわ〜いハッピーニングに遭遇した。それはロシアでもそう度々起きることではないが、日常あり得るハッピーニングだということは十分考えられる。現場では確かにショッキングな事件だったろう。しかし、再発の可能性があるということは、それ以前にも似たようなハッピーニングがあったということでもある。にも拘わらずハッピーニング発生の原因を排除しようとの動きや雰囲気は周囲からまったく感じ取れなかった。国を挙げて無視しよう、忘れようという風を感じた。嫌なことは忘れて風化させてしまおうと考えていると思わざるを得ない。これでは、事故や危険なハッピーニングはなくなるはずがない。事故を防止しようとの緊張感や危機感がまったくないのだ。よほど自分が気をつけていないと、いつ事故に巻き込まれるか分からないという怖さがある。

筆者が旅行中に目にした恐ろしい体験と不安を挙げてみたい。

①列車にひき殺されそうになった乗客

旅行中最も度肝を抜かれたのは、14世紀にタタール人の町として勃興した、油田の町・チュメニに停車した時のことである。駅前周辺の様子を見学して再び列車へ戻って、女車掌と話をしていた時だった。近くの乗客の間から不意にざわめき起きた。筆者の乗っている列車「バイカル」号の後方から、黒煙を吐きながら回送列車が近づいてきたのである。まだ大勢の乗客が列車から駅舎へ行ったままだったが、中には慌てて戻って来る人もいた。人々のおびたしい往来に警戒合図であろうか、列車は大きな警笛を吹き鳴らした。ところが、その列車は、こともあろうに何の連絡もなく「バイカル」号と駅舎の間に「川」の字型に停車して、乗客の往来を妨げる形になってしまったのである。よく見れば、新潟から一緒になった旅行好きの老教師がまだ戻って来ていなかった。「バイカル」号もまもなく発車時間である。

ようやく戻って来た初老の先生も「バイカル」号へ近づくことが出来ず、どうして良いか分からず、さすがに青くなって、回送列車の向こう側で熊のように右往左往している。大勢の乗客が列車から降りて近くの線路上を歩き回っているのに、安全管理のために駅員が誰一人やって来ない。回送列車の乗務員も保安要員もいない。突然、あっと驚くパフォーマンスがあった。何とロシア人の若いカップルが、覚悟を決め列車の車輦下を腹這ってくぐり出したのである。雪の上を匍匐して必死に前進しようとした。列車が動いたらふたりはそのまま昇天である。周りの乗客がハラハラしながら固唾を呑んで見守る中を、カップルは雪だらけになりながらも何とか危険なトライアルを終えた。ところが、それを見た先生は、彼らの行動に刺激され大胆不敵にも同じように危険な賭けに出た。こんなところで轢き殺されたのでは、たまったものではない。周囲がやきもきしている間に、大の大人の先生は泣きべそをかきながらようやく列車から這い出して来た。周囲のロシア人乗客からも一斉に歓声があがった。とにかく大惨事にならずにほっとした。

鉄道会社に勤務して現場駅員の経験もある筆者から見れば、日本では安全管理上とても考えられない無警戒ぶりである。乗客や通行人を何とも思わないシベリア鉄道の安全管理基準を目の当たりにして恐ろしくなった。かつては尊い人命を尊重するとか、万人平等で平和な福祉国家建設などとカッコよくアピールしていた、社会主義国家ソヴィエト連邦の隅々ではそんなきれいごとは、実はこれっぽちも考えられていなかったということを骨の髄まで思い知らされることになった。

②危険なエスカレーターと地下鉄の扉

世界的にも豪華な構造と施設で有名なモスクワ地下鉄に試乗した時のことである。地下奥深くまで潜る駅構内は、ドームのような空間が美術館と見まがうばかりの洒落たデザインと素晴らしい施設で知られている。

ところが、駅舎と地下プラットフォームを結ぶ長いエスカレーターが異常に速いスピード

で上下動するのだ。筆者はそれまで、こんなに速いエスカレーターに乗ったことがなかった。自由に身体を動かせる健康な人ならまだしも、高齢者や子どもには少し危険ではないかと案じていたところ、エスカレーターの乗り口と降り口でお年寄りが見事に転倒していた。乗る時だって、アゴで拍子をとって「やっこらっしょ」と素早く乗り込むタイミングと決死的な覚悟を求められる。日本のエスカレーターのスピードは普通秒速1 mだそうだが、モスクワ地下鉄ではなんと1.6mだとガイドはしゃあしゃあと応えてくれた。

次に地下鉄に乗車して、またまたびっくりした。扉が両側の戸袋から弾丸のように勢いよく飛び出してきて、これまたすごい勢いでガチャンと閉まる。しかも緩衝材を使用した扉ではないから、万が一扉に手足を挟まれたら骨は粉々に砕けてしまうだろうと思われた。そのためだろうか、日本と違って扉の周辺に乗客は寄りつかないように見えた。

いずれにしろ、これでは事故は毎日のように起こり、負傷者が毎日出て、地下鉄構内では毎日修羅場が繰り返されているのではないかと心配になった。だが、そのこと自体よりこんな危険な状態がそのまま放置されていることの方が、むしろ不可解で理解出来なかった。

皮肉を込めて言えば、これでは人口が減少するわけだ。

10. 「ロシア」は異質なのか

前項にその一端を紹介したように、ロシア国内を旅行している間には、思いがけないことに遭遇する。ある程度ロシアを知る人たちは、それをごく当たり前として受け止めているようだ。第2項で触れたように、過去においてマス・メディアが事実を正確に報道してこなかっただけだ。異国に住む外国人が、ツンボ棧敷に置かれていただけに過ぎない。

最近になって、本項のテーマを掲げてようやくロシアの異色性の一端に関する、マス・メディアの論稿（6月12日付日経「核心」欄コラムニスト・土谷英夫記）が紹介された。『ロシアは異質』なのか」と題して外交問題の「核心」に据えて論じている。石油や天然ガスを脅しやゆすりの道具にしていると厳しく非難するアメリカ、そのアメリカと手を携えながら市場原理を優先する日欧と、高騰した石油価格を背景に価格改定交渉で駆け引きをしながらエネルギー産業の国家管理を強めているロシアが、対立する構図を「新たな冷戦」と看做す声もあると論評した。

「ロシアに、西側諸国は『蝶』に孵化すると見守ったら『蛾』が生まれたような失望を味わっている。『わが道を行く』ロシアの背を押すのが高騰した原油価格だ。石油産出量は世界最大のサウジアラビアに肉薄し、天然ガス産出量は世界一。エネルギー輸出で外貨準備は2,000億ドルを超え、98年の債務危機がウソのよう。もはや西側の助けは要らない。エネルギー増産で世界経済に貢献している、という自負もある」と「核心」論者は分析している。

豊富な地下資源のお陰でロシアを取り巻く経済環境がプーチン政権にとって有利となり、内外に権力の誇示を見せつけているが、ロシア民族には元来大国意識や覇権主義の血脈があることは、すでに述べた。極めて異質であり、極めて利己主義であり、極めてわがままであ

る。こういう大国意識を抑えきれない国家を相手にした話し合いや交渉は、中々一筋縄ではいかない。普通的外交交渉ではとても通じる相手ではない。しかし、人間もその通りであるように、自分より手強いと思える相手国に対しては、あまり強引な手を打た（て）ない。ロシアにとっての相手国とは、世界の超大国アメリカであり、経済成長著しい中国である。アメリカに対しては、その圧倒的な国力にとっても太刀打ち出来ないと分かっているからである。中国に対しては、地下資源を除く、人口、軍備、実質経済力等の面でいまや後塵を配しているとのコンプレックスのような認識がある。それが証拠に、ともに覇権主義で自国の主張を譲らない中ロ両国が、国境紛争の絶えることのなかった中ロ国境 4,000 kmを、1997 年 11 月の「国境画定作業の終了宣言」により、あっという間に両国間の懸案事項を解決してしまったのである。それに比べれば、小さな国境問題である「北方領土返還」交渉は、一向に進展しない。核を持たず、軍事力でロシアに劣るわが国は、軟弱外交の弱小国として見くびられているからである。

11. 忌わしい過去の歴史

鎖国の江戸時代までは、ほとんど国交の窓口は開かれていなかった。精々漂流者大黒屋光太夫の女帝エカテリーナ 2 世への謁見という歴史的な逸話が伝えられる程度に過ぎない。そして、プチャーチンの開国要求を経て、明治維新、日露戦争へと一気に時代が進む。

わが国にとって、最も呪わしい出来事は、1941 年 4 月に締結された「日ソ不可侵条約」の旧ソ連による一方的な破棄であろう。スターリンは 1945 年 2 月に開催されたヤルタ会談でチャーチル英首相、ルーズベルト米大統領に対して、すでに対日参戦を約束していた。広島に原爆が投下され、疲弊した日本の敗戦が明らかになった 45 年 8 月 8 日、突如ソ連は日本の弱みにつけ込み対日宣戦布告した。日本がポツダム宣言を受諾したのはその一週間後である。

今次世界大戦において覇権国家ソ連がどれだけ残酷で、社会主義とは対極にある帝国主義者で、裏切り者であるかということは、ロシア帝政以来の血塗られた歴史を見れば明らかであるが、自らの利だけを追求した、この寝返りの一件だけ見ても明白であろう。

「知的生産の技術研究会」本年四月の定例セミナーで「国家の品格」の著者・藤原正彦御茶ノ水女子大教授は、満座の受講者を前にソ連のこの火事場泥棒的不正義について、熱弁をふるってこき下ろしておられた。

「昭和 20 年 8 月 9 日の未明に、ソ連軍がいきなり満州に 170 万人の軍隊と 5 千輛の戦車と 5 千機の航空機で攻めてきました。日本がアメリカとの戦いで臨死状態になっているときに、やってきて火事場泥棒を働いた。そして、婦女子を暴行し、60 万人の日本人をシベリアに連れて行って、強制労働させ、10 万人近くを殺した。さらに満州にあった当然中国に帰属すべきものを工場を壊して運び去った。このような行為は火事場泥棒を地でいったものです。永遠に許せません。原爆と同様です」。

①旧ソ連が狙っていた国外領土

大国意識の強い旧ソ連は、あの広大な国土を有しながら、なお「あがりのある」植民地を求める帝国主義国家であった。ソ連は執拗に領土の拡大を図り、外に新たな植民地を求めていた。しかし、すでに 20 世紀前半には、地球上はほぼ先進国が直接統治する本国と、先進国が治める「あがりのある」植民地に分割され、統治されていた。いまさら後進国であるソ連が植民地獲得により領土の拡大を企てることは難しく、国際紛争か、或いは国家間の戦争の機に乗じて、略奪するか、勝ち馬に乗って戦利品を要求するしか手段はなかった。ソ連は、戦費をつぎ込まずに手のかからない「棚からぼた餅」式のずるいやり方で、勝ち馬に乗ったのである。樺太、千島列島、北方領土を巻き上げ、朝鮮半島を分割して北を植民地化し、あまつさえ北海道も奪い取ろうとした。

そもそも共産党が飛ぶ鳥を落とす勢いだった時代の「**帝国主義国家ソヴィエト連邦**」の狙っていた版図とは、北極点を基点に旧ソ連の最西端カーリーニングラード（東経二一度、現在もリトアニアとポーランドに挟まれたロシアの飛び地）と最東端チュコト半島（西経 170 度）の経度が、最南端トルクメニスタン国（旧ソ連邦）がアフガニスタンと接する国境（北緯 36 度）の緯度の延長線と出会うトライアングルの内側だったのである。マケドニアのアレクサンドロス大王も顔負けの、途方もない大野望を抱いていたことになる。こうなると、勝者の戦利品として、戦後直ちに前記トライアングルに完全に入っていた北海道を、旧日本領とともに、当然のように戦利品としてスターリンが米英仏へ要求したのも頷けないでもない。

②ロシアが果たすべき責任、義務と他国からの信頼

日本の外交力は国民を諸外国の干渉から守る信念と逞しい背骨がなく、外国につけいられるスキだらけである。それにしても日ロ交渉を眺めていると、ロシアの手練手管に思うように振り回され、北方領土返還交渉も一歩前進しては、一歩も二歩も後退する交渉経緯では、将来的にまったく展望が開けない。

列車からどこまでも続く沿線の雪景色と白樺林をぼんやり眺め、笑顔は滅多に見せないが、割合お人好しのローカルのロシア人に、「あなたの国のトップの人たちのせいで、世界中の国や人びとが迷惑を蒙っていますよ」とそっと言ってやりたいくらいだ。

前出の通りロシアの外貨準備高は、原油価格の高騰という外的要因によって、いまや 2 千億ドルを超えた。これは近年ロシアに大きな追い風が吹いた幸運と天から授かった宝物によるものであり、間違ってもロシアの力だけで築き上げた資産ではない。万に一つ、大地震や地殻変動により油田が他国の地下鉱脈に少しでもずれこんでいたら、今ごろ経済は破綻し、クレムリン周辺には、ホームレスがたむろしていたことだろう。7.8%という高い成長率に

よる発展と膨大な外貨準備高にしても、それほどロシアにとっては、得意気にひけらかすような金額ではない。むしろ、ロシア政府が大国意識を振りまき諸外国の信頼を得たいなら、国連常任理事国の立場上その果たすべき役割、義務、責任をきっちり全うすることが、最も国際社会に貢献し、世界の人びとから信頼を勝ち得る近道ではないだろうか。

「他人の行動に指図はするが、自分ではやらない」「他人の懐は当てにするが、自分の財布のひもはゆるめない」「やることなすことすべて自分本位で、他人の鬻蹙を買う」と自己中心的でずるい人を非難する時に使われる辛辣な表現がある。

厳しいようだが、今日のロシアの行動原理は、このタイプに合致していると思う。わが国も自己中心的なロシアに対して発言すべきことは断じて言わなければならない。言わないから相手から見くびられるのだ。正論だと信じることを終始一貫して言い続け論じて、相手を説得することが現代のディベート交渉では最も基本であり、大切なことである。軍事力では今のところ歯が立たないが、常にチクリと言うべきことを言い続けることこそが、相手にはジャブのように効いてくる。

ロシアが国際的な市民レベル感覚でどれほど好意的に思われていないか、筆者自身が知らされた卑近な例を紹介しよう。

4年前のサッカー・ワールドカップで日本代表チームがロシアを破り、決勝トーナメント進出を決めた時、筆者はたまたまロンドンに滞在していた。翌日イギリスチームが、強敵アルゼンチンとの決勝を前にしたサッカー王国のイギリスでは、マス・メディアがアルゼンチン戦に対する戦略や予想記事を取り上げるのが常道である。にも拘わらず、敢えて老舗「タイムズ」紙は、第一面に日本の勝利とロシア敗退を快哉を込めて報道し、同時に暴徒化したモスクワのサポーターが荒れ狂う姿をカラー写真入りで大きく掲載した。さらに裏面にはイラスト入りで日露戦争の経緯と日本海海戦におけるロシアの敗戦まで細かく説明して、イギリス人の日頃溜まっていたロシアへの怨念と鬱憤を晴らしていた。これは部外者にはほんの些細な現象であるかも知れないが、はしなくもイギリス人の反口感情が表面化した具体的なひとこまである。ロシアが最も神経をすり減らす公的な報道チャンネルを通じて、真実の声がイギリス国民に広く伝えられた。こうして市民レベルで好意的でない噂が人の口を通して拡がっていくのである。ロシアがこれから国際社会でリーダーの地位を固めていくためには、こういう街角の市民の声に真摯に耳を傾け、傲慢な現在の対応をもっと国際的にも信頼される、謙虚で真っ当なスタンスに変えていく必要があるのではないか。

ロシアが果たすべき責任については、もうひとつ言っておかなくてはならない。

現在国連加盟国 191 カ国（2006 年 1 月現在）のうち、常任理事国である「大国」ロシアの分担金は僅か 1.1%（1,960 万ドル）に過ぎない。ところが日本は国連加盟国中 2 番目に多い分担金拠出を強いられている。常任理事国でもない日本が、実に 19.47%（3 億 4,640 万ドル）で全体の 5 分の 1 もの資金シェアを分担している。わが国は特別の権限を付与されていないにも関わらず、これほどの巨額を分担金として拠出しているのは腑に落ちない。この数字はいかにもバランスを欠き、その数値の根拠（一応算出根拠はある）には説得力も乏

しく、理不尽でさえある。わが国の国連外交の軟弱さとともにリーダーシップの欠如を世界にPRしているようなものである。アメリカが、22%（4億3960万ドル）を負担して分担金トップであることは至極当然と受け止められている。アメリカの立場上国連常任理事国として金も出すが、口も出している現状はある程度それなりに理解されてはいる。一方で、最貧国のひとつでもあるメキシコにも及ばないロシアの分担金は、公平負担の原則や社会通念上からも、到底承服出来るものではない。

そもそもロシアが各国から共感を得られないのは、経済成長と原油価格の高騰により、近年経済的に潤っていながら、自国の立場を主張するばかりで国連分担金の増額を渋ったり、発展途上国へのODAに対して冷淡な対応をしたり、地震等の自然災害に際して被災者に対して人道支援面で、積極的かつ前向きな行動を起こそうとしない点である。すべて自己本位なのである。いままでのように自国だけ良ければよいとする利己主義では、このグローバル化時代において世界の信頼を勝ち得ることはまず望めまい。

翻って日本は、ロシアとの交渉に際してもう一度鞭を締め直し、北方領土返還交渉を始め、ロシア政府の理不尽な態度に対して、根拠のある数値を基に国際社会の理とわが国の言い分をしっかりと伝え、併せて国際的な信義と信頼について硬軟両面併せて臆することなく諄々と論じ、強い姿勢で交渉に臨む心構えが大切である。

12. まとめ

随分いろいろとロシアについて手厳しく書いてきたかも知れない。

最後にもうひとつ。いよいよ印象深かったシベリア鉄道の旅を終え、モスクワ・シェレメチェボ国際空港で搭乗手続きをしようとした時、またまたロシア国家の最後っ屁に首を傾げざるを得ないことになった。

唐突に航空会社のスタッフから託送荷物（トランク）に盗難防止用の梱包は必要ないのかと尋ねられた。意味が分からずポカ〜ンとしていた筆者に、係員は盗難防止梱包の何たるかを教えてくれた。つまり、トランクをそのまま預けると中身を抜き取られる恐れがあるので、ロックしたトランクをビニールでぐるぐる巻きに包んで、トランクごとパウチしてしまうというものだった。これなら短時間内に空港内で抜き取られることは絶対ないと誇らしげに語るのだ。手続きカウンターの前にはちゃっかり制服を纏った政府公認の梱包業者までいて、手際よくパウチしてくれる。ほとんどの外国人旅行者は、係員のアドバイスに従っているようだった。しかしタダというわけではなく、仮にも有料である。首都の国際空港で頻発する抜き取り事件なんて、国家にとっては国辱的で恥ずかしいはずである。何とか犯人を見つけ出して事故絶滅を期するのが、常識的な筋道だと思う。にも関わらず、ロシアではそうは考えられていないようだ。その気になれば撲滅可能な抜き取り犯人探しより、国ぐるみで金儲けにうつつを抜かしている、何とも締まらない構図なのである。こうして、国は外国人旅行者から合法的？に余分な金を巻き上げる。最後の最後まで予期しない場面に遭遇する、よく

分らない国だった。

ロシアにはまだわれわれが知らない未知の部分が多く、多くの隠れた魅力に富んだ国でもあり、今日のロシアをすべて知ろうとすることは中々難しい。よく考えれば、未知であるが故に多くのエトランジェの興味をそそるのも事実である。長い伝統の中で息づいてきた芸術・文化面の水準の高さや、国土が広いだけに未開地の自然等の固有の魅力に溢れている。やはり放っておけない、訪ねてみたくなる国ではある。深夜安全柵のない二段ベッドから滑り落ちそうになったり、全線電化にも拘わらず暖房だけが石炭の理由は、停電すると乗客が一夜で凍死してしまうというぎょっとするような話題を聞かされたり、ロシア式モラルや社会通念に戸惑ったり、ハッピングもあったが、まさに大陸的なシベリア鉄道の旅はそれまでに乗ったどんな鉄道の旅よりも正直言って楽しかった。雪原と白樺林を見ているだけの単調な風景の中に、現代の超過密な生活に押し流され自分を見失っていることを再認識させられた。行きずりの乗客たちとの素朴な交流に心を癒され、忘れがちな人びととのふれあいの大切さを思い出させてもくれた。車内で純朴な人たちと遊んだひとときは、いまでも懐かしい思い出となって甦ってくる。なんだかんだと言っても、筆者も案外この国の魅力の虜になったエトランジェのひとりであるのかも知れない。

本稿に引用した情報や内容は、統計数字を除くとほとんど自分の目で見たり、調べたうえで自分の考えとして固まりつつあるものである。もし、読者が少しでも内容に疑問を感じたら、まだそれだけロシアの正確なニュースがわが国へ伝わってきていないということを証明することにもなる。常に筆者が懸念しているのは、実はその点である。ロシアには、いまだに報道管制にも似た当局の情報コントロールがあると聞いている。筆者自身ある停車駅の周辺でカメラを撮っていた時に、不意に若い迷彩服姿のロシア兵から「ニュット！」と強引に両腕で止めさせられたことがあった。日本のマスコミ各社が、特派員をどのくらいかの国へ駐在させているのかは分からないが、彼らも自分の意思で勝手に取材活動に赴くことが出来ないという。プライベートな旅や行動も制約を受けているようだ。ロシアの地方都市から伝えられるニュースがそれだけ少ない理由である。

ロシアという国は、昔から威信や功績をプロパガンダすることには、何を措いても積極的に関わろうとしてきたが、自国の恥部の公表とか暴露とか、マイナスイメージを明かされることにはいまでも執拗に抵抗しようとする。自国のローカルニュースを他国の人びとが厳密に調べあげて、仮に事実を正当に報道するにしてもその行動自体を潔しとしない。ロシアについて外国人が書いた記事を管理（場合によっては検閲）し規制を加えるのである。これだからロシアの実態は幻となって、どうしても真実が見えてこない。事実をありのままに伝えるとか、真実を暴くという報道取材の自由は認めず、出来るだけ秘密裏に行おうとする保守的で、秘密主義的な隠蔽体質は、自由主義を謳いながらいまでも厳然と続いているのである。

本稿では、いくつかの問題点は提起したが、まだ問題解決への糸口となる根本的な答とか、解決方法を提起するまでには至っていない。限られたスペースでは、あまりにも問題が大きく多岐に亘っているせいもあるし、筆者の力不足によるものでもある。ただ、読者に知って

おいて欲しいのは、いまでも現実はこのようにわれわれが奇想天外で驚くようなことが多く、ロシア社会には数多くの矛盾と問題点が溢れているという事実である。せめてこのような実情を知ってもらえれば、ロシアに関する報道記事に接した時、真実を理解するうえで参考になることと思う。ロシアから知らされるすべてのニュースに一步距離を置いて、一旦ロシア官製のリトマス試験紙を剥がして自分の知識と社会通念と知恵で判断することである。そのためには、日頃から綿密な分析力と鋭い考察力を培っておくことが大切であると考えている。

いまロシアと外界とのコミュニケーションのありようを見ていると、ロシアはまた、自国民の不満を外へ逸らすため、アメリカを中心とする西側諸国が懸念する中を、エネルギー供給国の立場から積極的に資源外交をもくろんだり、中長期の国家戦略を記した国家安全保障戦略を推し進めようとしている。自国の覇権と存在感の確立を目指して新たな国内枠と外枠の連帯構築へ踏み出そうと新たな動きを示し始めたのである。どうしても、お山の大将にならねば居られないロシアの覇権主義は、このまま一体いつまで続くのであろうか。まだ、当分の間ロシアから目を離すことは出来ない。